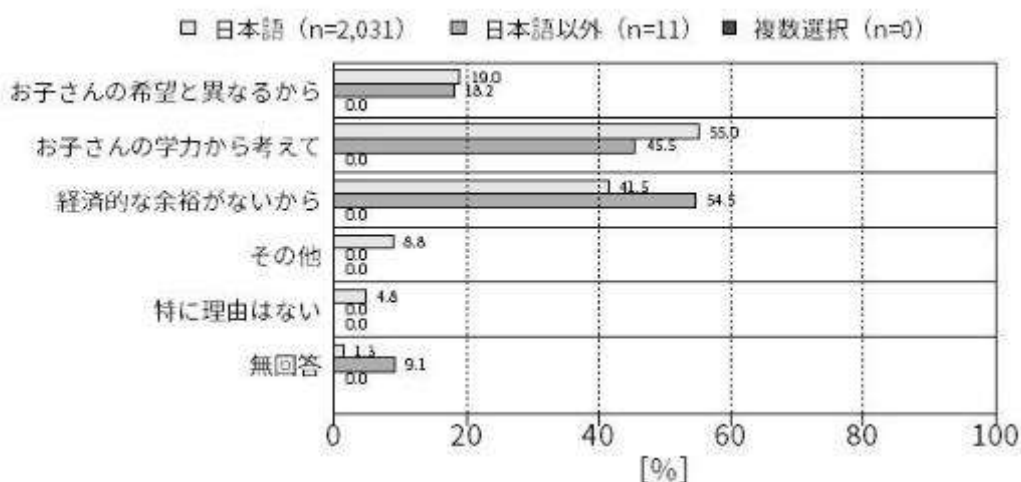


日常生活でよく使う言葉別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由（保護者票 問2×保護者票 問17）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

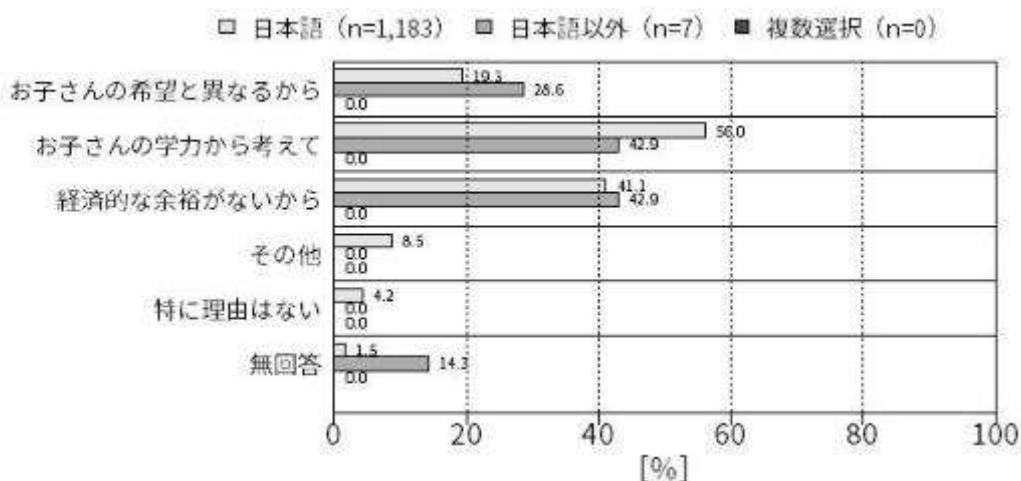


図 277. 日常生活でよく使う言葉別に見た、子どもの進学達成「思わない」理由

日本語を母語としない場合、子どもが希望する進学先まで進むと思わないと回答した理由として、日本語を母語とする場合よりも高いのは、「お子さんの希望と異なるから」28.6%（日本語を母語とする場合に対して、1.5倍）であった。

日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードの所持状況（保護者票 問2×保護者票 問18）

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

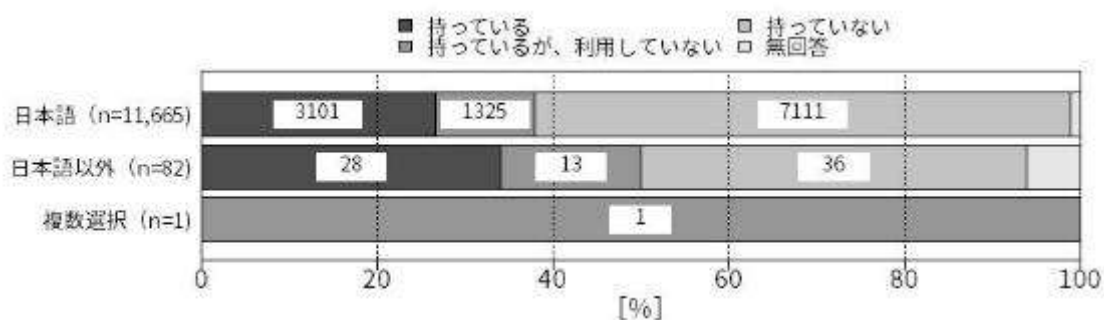


図 278. 日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードの所持状況

日本語を母語としない場合、塾代助成カードを「持っている」と回答した割合が 34.1%であるのに対し、日本語を母語とする場合では 26.6%である。

日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードを持っているが利用していない理由（保護者票 問2×保護者票 問19）

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

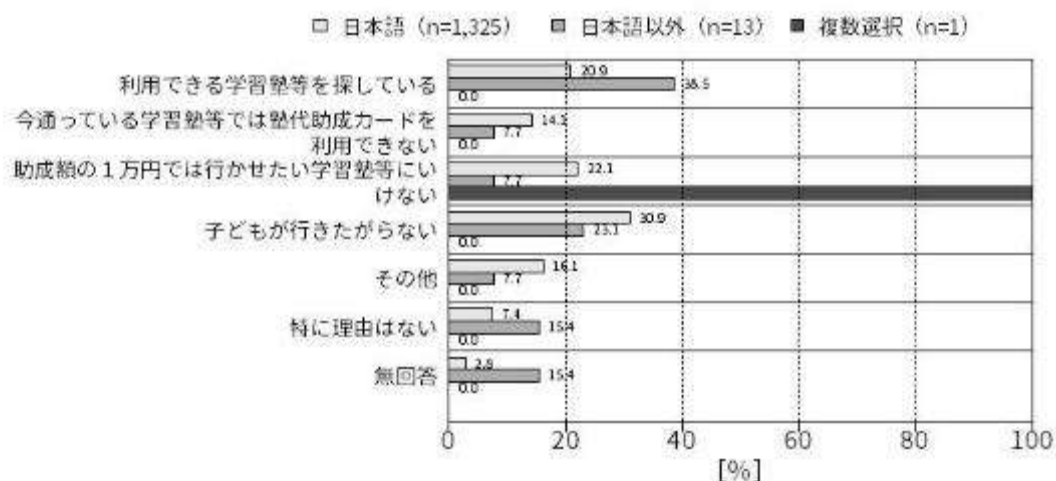


図 279. 日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードを持っているが利用していない理由

日本語を母語としない場合、塾代助成カードを持っているが利用していない理由として、日本語を母語とする場合よりも高いものは「利用できる学習塾を探している」38.5%（日本語を母語とする場合に対して、1.8倍）であり、言語ゆへの学習塾利用の難しさがある。

日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードを持っていない理由

(保護者票 問 2×保護者票 問 20)

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

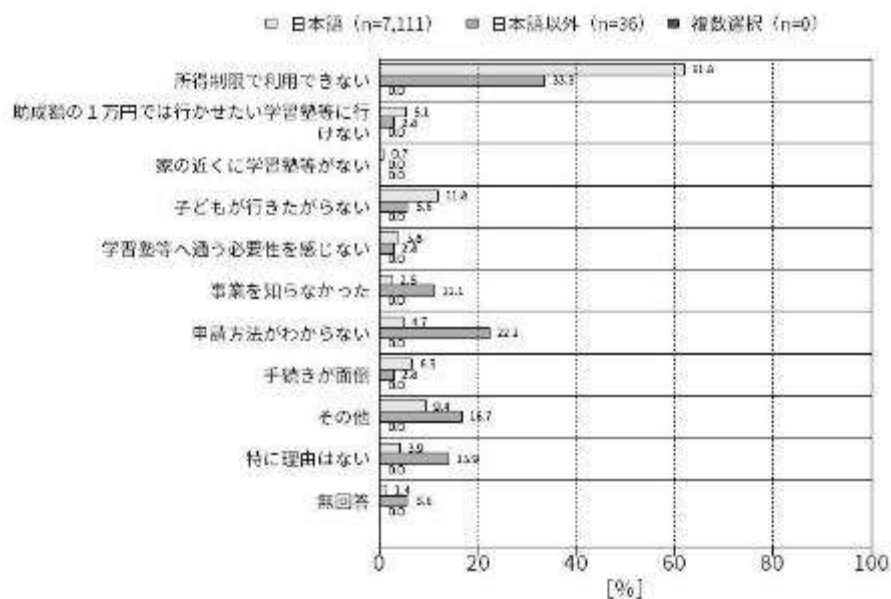
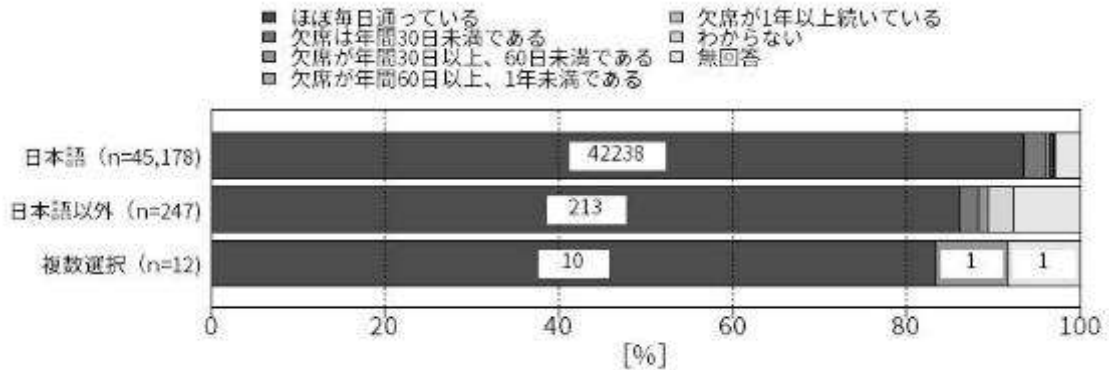


図 280. 日常生活でよく使う言葉別に見た、塾代助成カードを持っていない理由

日本語を母語としない場合、塾代助成カードを持っていない理由として、日本語を母語とする場合よりも高いものは「申請方法がわからない」22.2%（日本語を母語とする場合に対して、4.7 倍）、「事業を知らなかった」11.1%（同じく、4.4 倍）であり、言語ゆえの難しさがある。

日常生活でよく使う言葉別に見た、子どもの通学状況（保護者票 問 2×保護者票 問 21）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

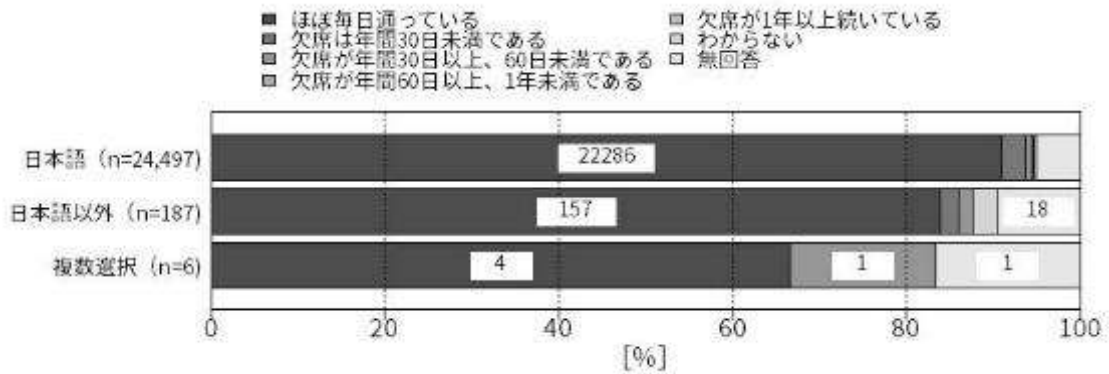


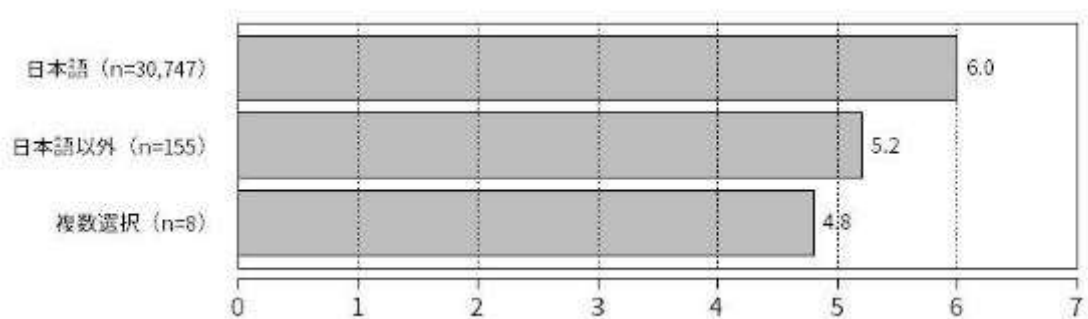
図 281. 日常生活でよく使う言葉別に見た、子どもの通学状況

日本語を母語としない場合、学校に「ほぼ毎日通っている」と回答した割合は 84%であるのに対し、日本語を母語とする場合は 91%、日常生活で複数の言語を使用する場合は 66.7%である。

日常生活でよく使う言葉別に見た、支えてくれる人得点（保護者票 問2×保護者票 問23 ①～⑦）

※「支えてくれる人得点」については図198上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市24区>

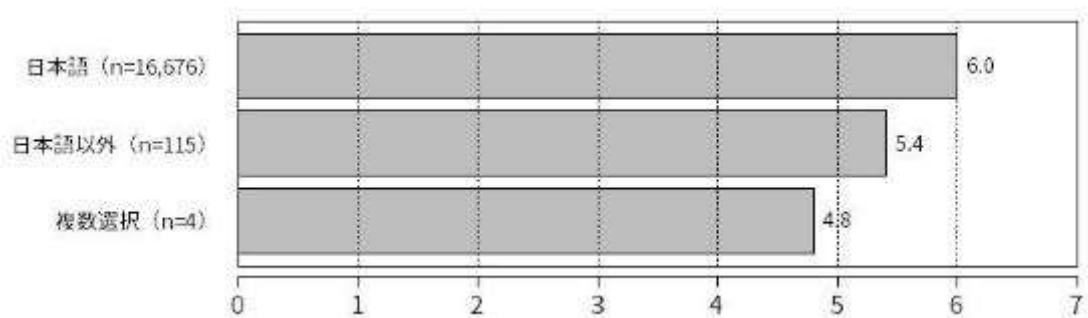


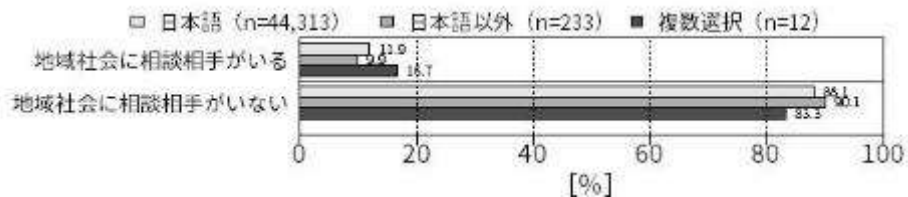
図282. 日常生活でよく使う言葉別に見た、支えてくれる人得点

日本語を母語としない人の方が、「支えてくれる人」の平均値が5.4点であるのに対し、日本語を母語とする場合では6.0点、日常生活で複数の言語を使用する場合には4.8点であり、日本語を母語とする以外の人では支えてくれる人が少ない傾向にある。

日常生活でよく使う言葉別に見た、地域社会における相談相手の有無（保護者票 問2×保護者票 問24）

※「あなたが本当に困ったときや悩みがあるとき、相談相手や相談先はどこですか」という問に対し、「学校の先生やスクールカウンセラー」「子育て講座（小・中学生を持つ保護者を対象）等を担当するリーダーや職員等」「公的機関や役所の相談員」「学童保育の指導員」「地域の民生委員・児童委員」「民間の支援団体」「民間のカウンセラー・電話相談」「医療機関の医師や看護師」のうち少なくとも1つを選択した人を、「地域社会に相談相手がいる」とした。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

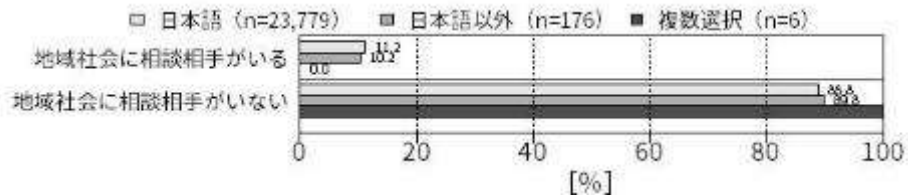


図 283. 日常生活でよく使う言葉別に見た、地域社会における相談相手の有無

日本語を母語としない場合は、「地域社会に相談相手がない」と回答した割合が 89.8%であるのに対し、日本語を母語とする場合では 88.8%、日常生活で複数の言語を使用する場合は 100%である。

<家庭生活・学習に関する考察>

本調査では、困窮度が高まるにつれ、子どもの勉強時間や読書時間が少なくなることが確認され、困窮度Ⅰ群では勉強を「まったくしない」と回答したのは14.9%で、読書を「まったくしない」のは37.6%であった。

このように困窮度の高い世帯の子どもが勉強や読書に時間を費やしていない理由の一つとして、子どもが勉強や読書をしようという意志の力を持っていないという可能性が考えられる。勉強や読書に長い時間取り組もうとする力は、日常的に自分をコントロールするような規則正しい生活の中で育まれることが指摘される (Baumeister & Tierney, 2011)。実際、本調査でも、起床時間が決まっている子どもや朝食をきちんと食べる子どもは、そうでない子どもよりも、勉強時間や読書時間が長いことが確認された。しかし、本調査では、中央値以上群と困窮度Ⅰ群を比べると、子どもと大人が「ほとんど毎日」一緒に朝食を食べる割合が中央値以上群では51.8%であるのに困窮度Ⅰ群では42.3%と少ないことや、子どもが学校から帰る時間には保護者が在宅している割合が中央値以上群では54.6%であるのに困窮度Ⅰ群では40.2%と少ないことが確認され、困窮度の高い世帯においては、子どもと大人の生活リズムにずれが生じやすい可能性が考えられる。そのため、困窮度の高い世帯では、子どもは、生活リズムの形成のモデルとなるものがなく、規則正しい生活リズムを獲得できていない可能性がある。本調査では、困窮度Ⅰ群において、学習理解を「あまりわからない」や「ほとんどわからない」と回答する子どもの割合は23.4%であり、困窮度が高まるにつれ、学習理解度が下がっていることも確認された。子どもの学習理解を促すためには、困窮度の高い世帯において、子どもの規則正しい生活リズムに合わせて大人が同じ時間を過ごせるような環境を設ける対策が重要になると考えられる。

あるいは、困窮度の高い世帯の子どもが勉強や読書に時間を費やしていないのは、子どもが高い学歴を望まず、学習に対する意欲がないためである可能性も考えられる。本調査では、困窮度Ⅰ群の子どもが「中学」「高校」(25.4%)または「専門学校」(17.3%)を主に進学先として希望していることが確認されている。Jost & Banaji (1994) は、しばしば、困窮度の高い世帯の人々が自分の地位や立場を正当化することがあり、それによって不平等な社会関係が維持されることがあると指摘している。たとえば、塾代助成カードの交付は経済的な事情により習い事に通えず勉強できないという問題を確かに解決するものの、このように、進学に対する希望の低さが作用しているのであれば、塾代助成カードの交付によって経済的な問題を解決できたとしても、子どもの学習意欲がないままでは学習塾に通うまでつながらない可能性がある。そのため、親子での文化活動を促し、保護者と子どもの学習や進学への意欲を同時に高めるような、あるいは、学校での授業などを通して、子どもが学習そのものを楽しみ感じられたり、より高い学歴の進学先に興味を持てたりするような環境を築く対策が重要となるだろう。

引用文献

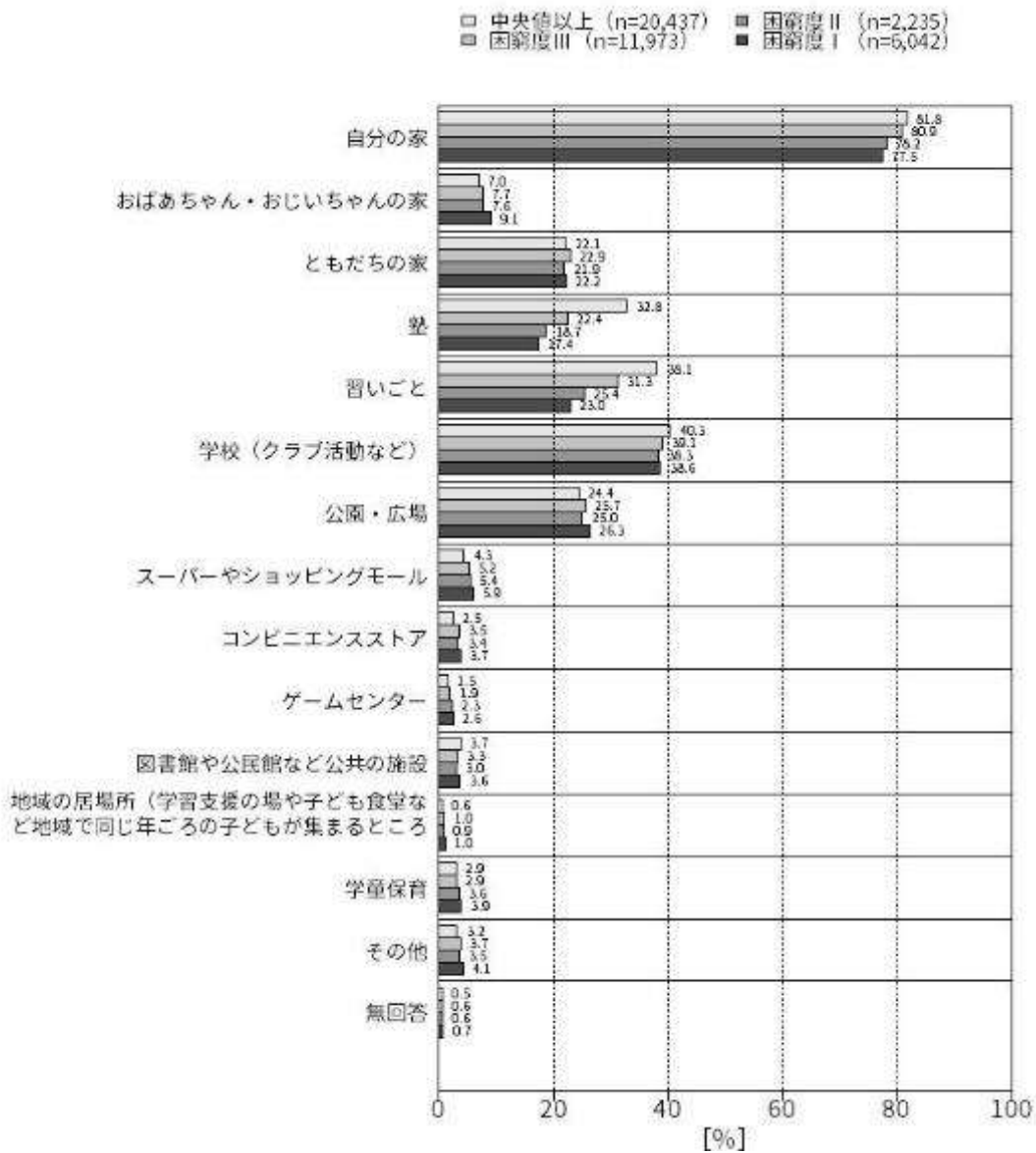
Baumeister, R. F., & Tierney, J. (2011). *Willpower: Rediscovering the greatest human strength*. New York: Penguin Press.

Jost, J. T., & Banaji, M. R. (1994). The role of stereotyping in system-justification and the production of false consciousness. *British Journal of Social Psychology*, 33, 1-27.

3-5. 対人関係

困窮度別に見た、放課後に過ごす場所（子ども票 問13）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

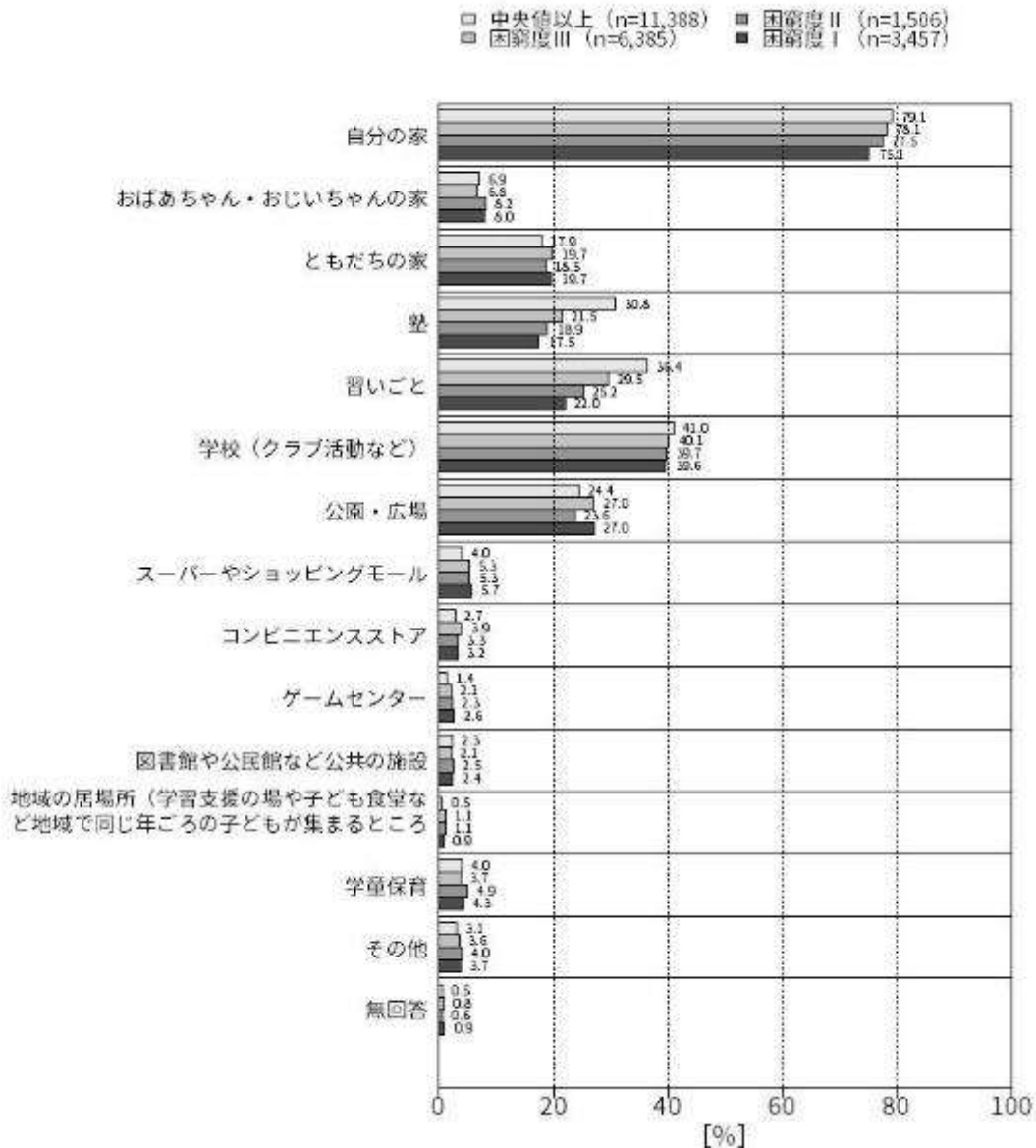
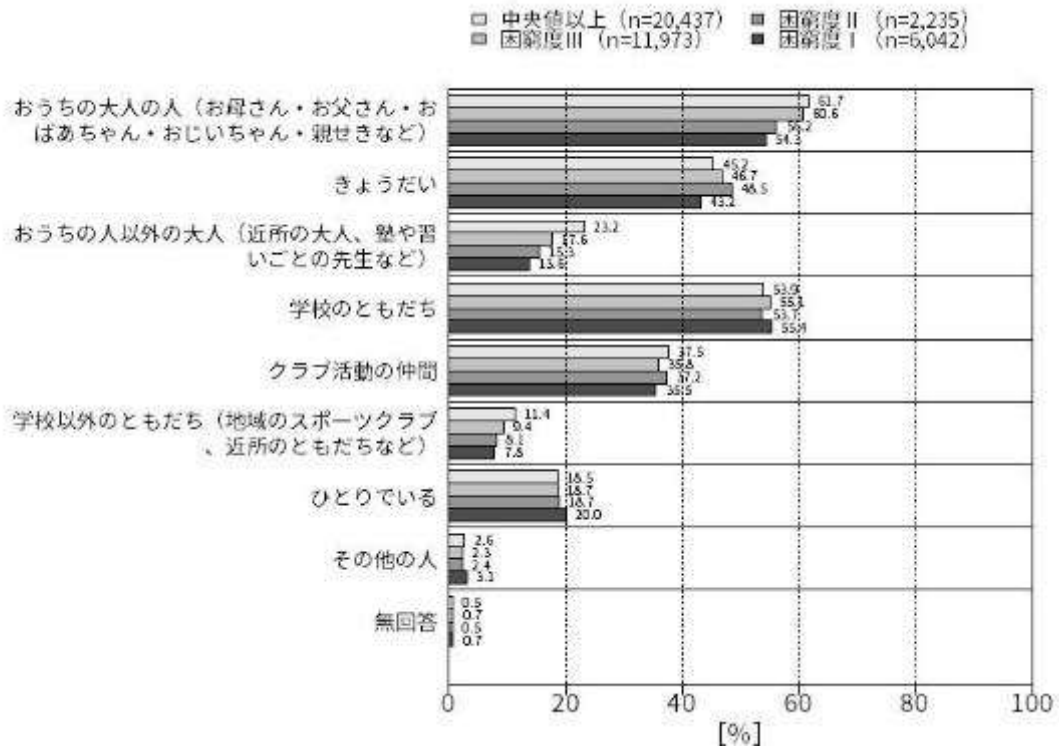


図 284. 困窮度別に見た、放課後に過ごす場所

困窮度別に子どもが放課後に過ごす場所を見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「ゲームセンター」2.6%（中央値以上群に対して、1.9倍）、「地域の居場所（学習支援の場や子ども食堂など地域で同じ年ごろの子どもが集まるところ）」0.9%（1.8倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。また、中央値以上群では「塾」30.8%（困窮度Ⅰ群に対して、1.8倍）、「習いごと」36.4%（1.7倍）、「自分の家」79.1%（1.1倍）が高かった。

困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人（子ども票 問 12）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

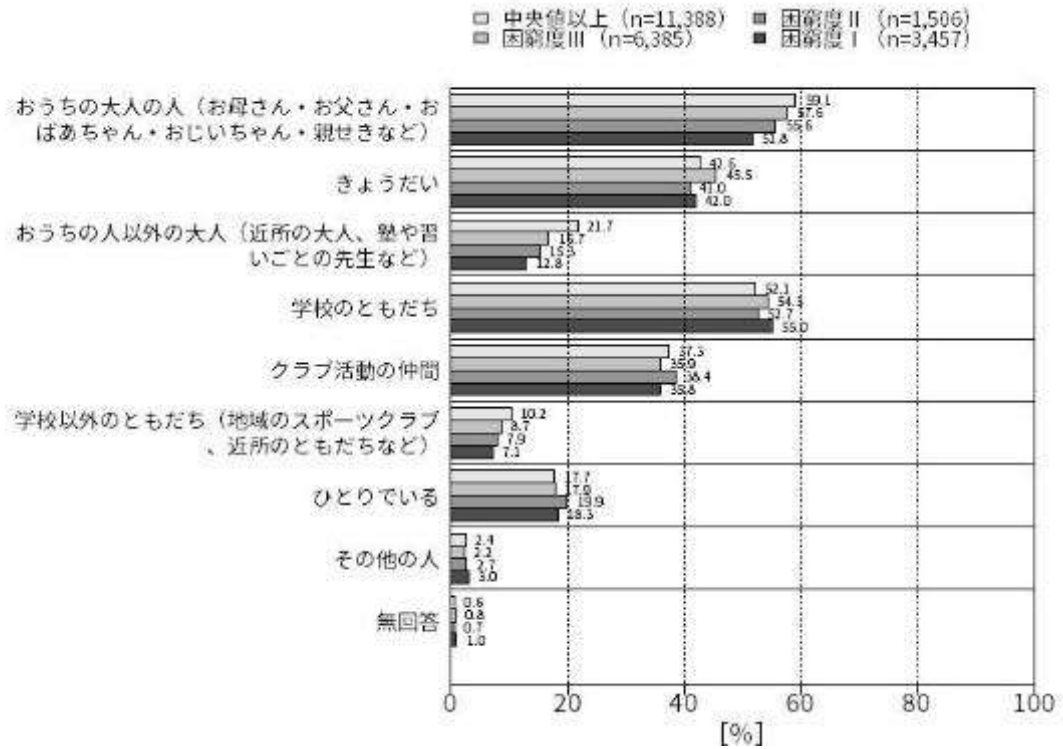
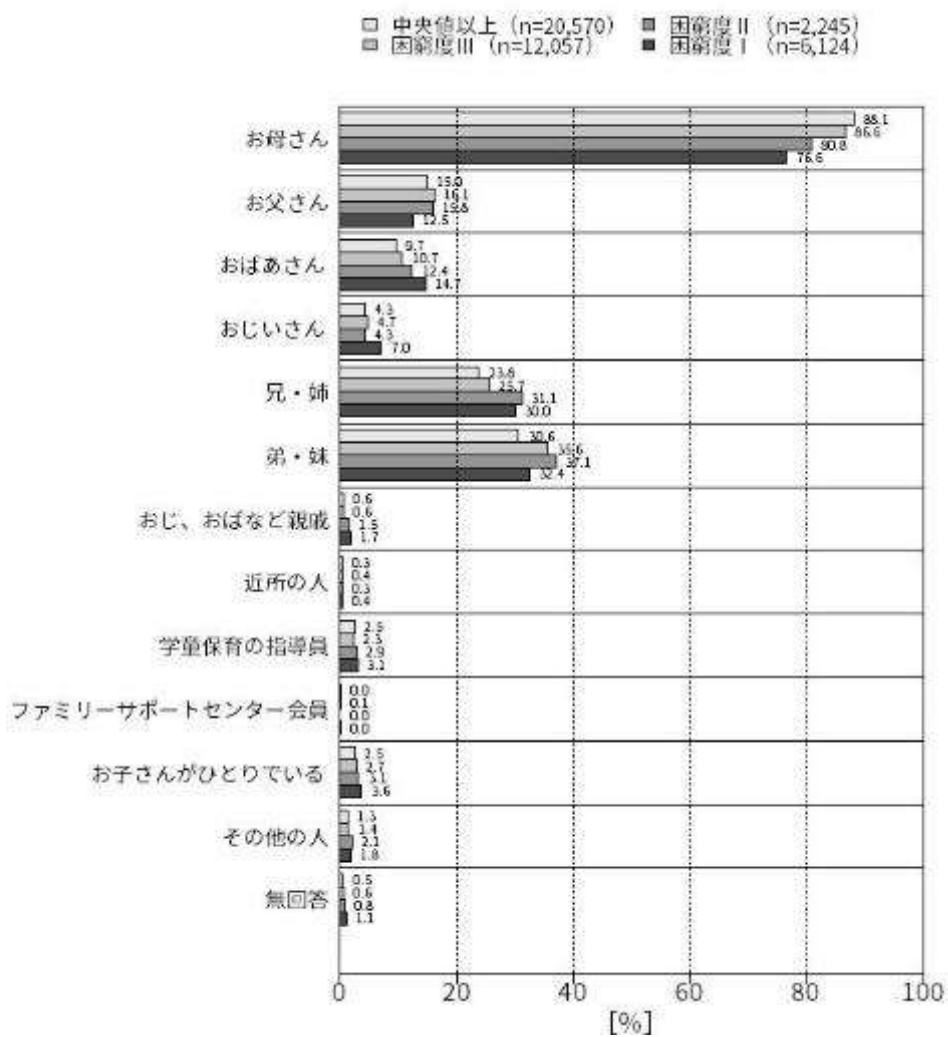


図 285. 困窮度別に見た、放課後一緒に過ごす人

困窮度別に子どもが放課後一緒に過ごす人を見ると、困窮度Ⅰ群においてとりたてて高いものは見られなかった。中央値以上群では「おうちの人以外の大人 (近所の大人、塾や習いごとの先生など)」21.7% (困窮度Ⅰ群に対して、1.7倍)、「学校以外のともだち (地域のスポーツクラブ、近所のともだちなど)」10.2% (1.4倍)、「おうちの大人の人 (お母さん・お父さん・おばあちゃん・おじいちゃん・親せきなど)」59.1% (1.1倍)が高かった。

困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人（保護者票 問 11）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

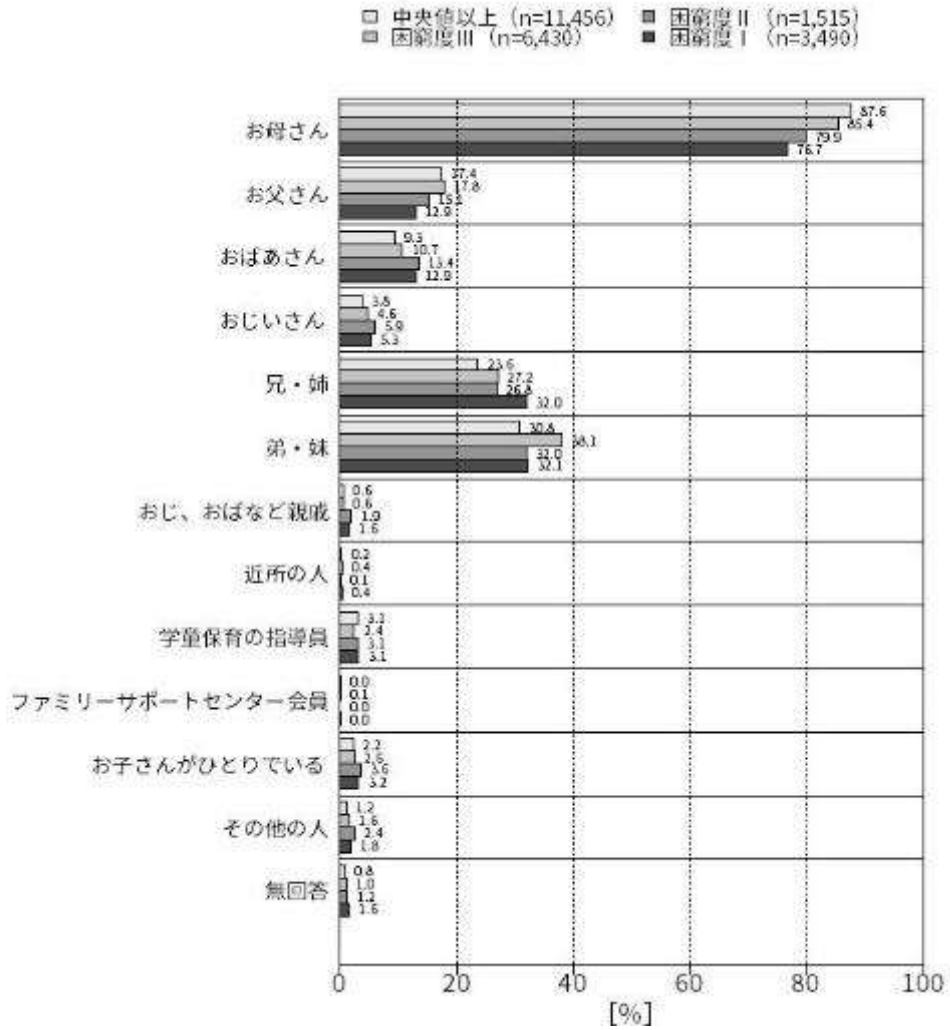
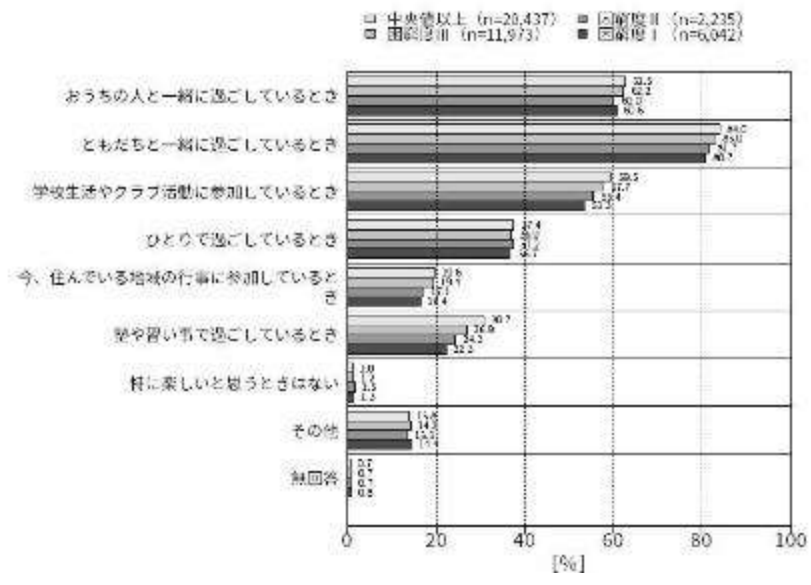


図 286. 困窮度別に見た、子どもと過ごす時間が長い人

困窮度別に保護者が放課後に子どもと過ごす時間が長い人を見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度Ⅰ群の数値を挙げると、「おじ、おばなど親戚」1.6%（中央値以上群に対して、2.7倍）、「近所の人」0.4%（2.0倍）、「その他の人」1.8%（1.5倍）となり、困窮度Ⅰ群において高い項目が複数みられた。

困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと（子ども票 問 11）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

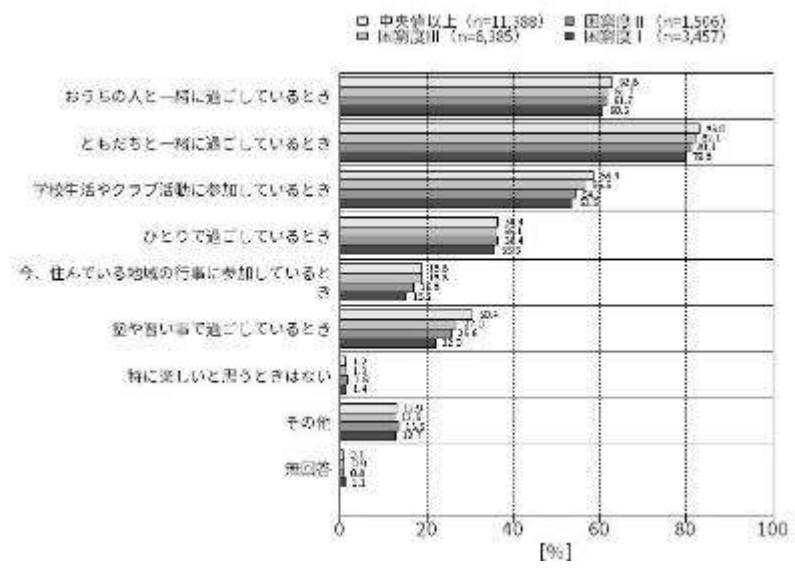
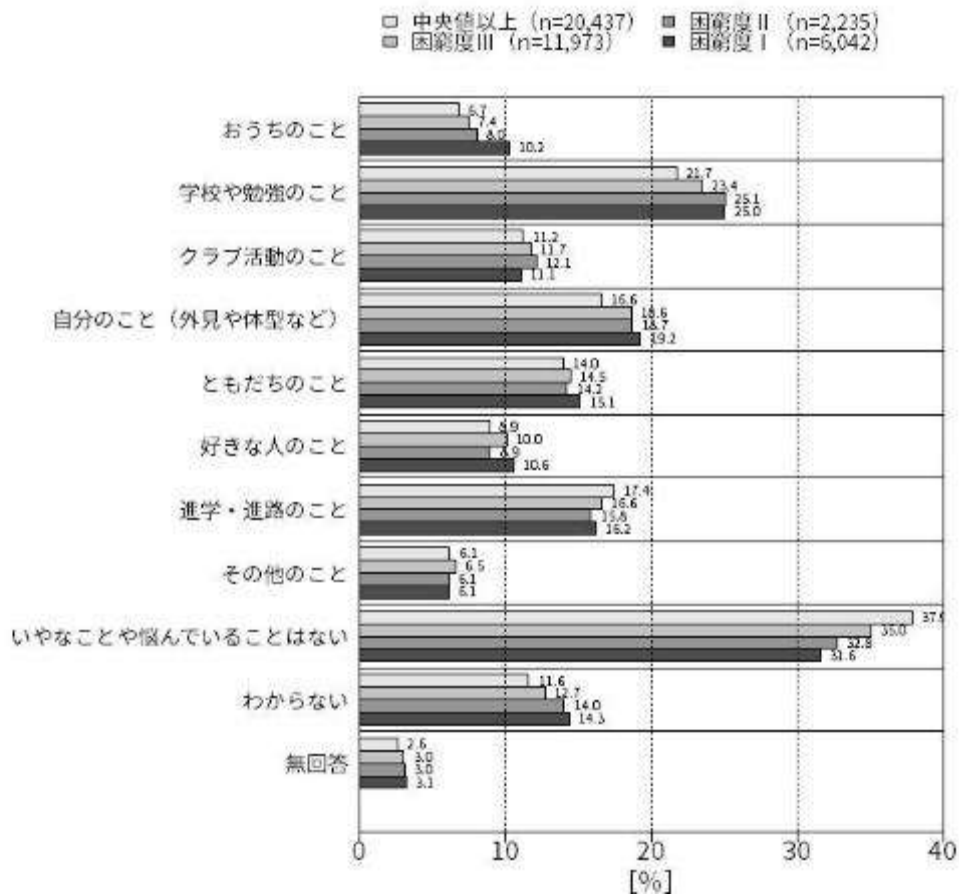


図 287. 困窮度別に見た、毎日の生活で楽しいこと

困窮度別に子どもが毎日の生活で楽しいことを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で大きな差は見られなかった。

困窮度別に見た、悩んでいること（子ども票 問21）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

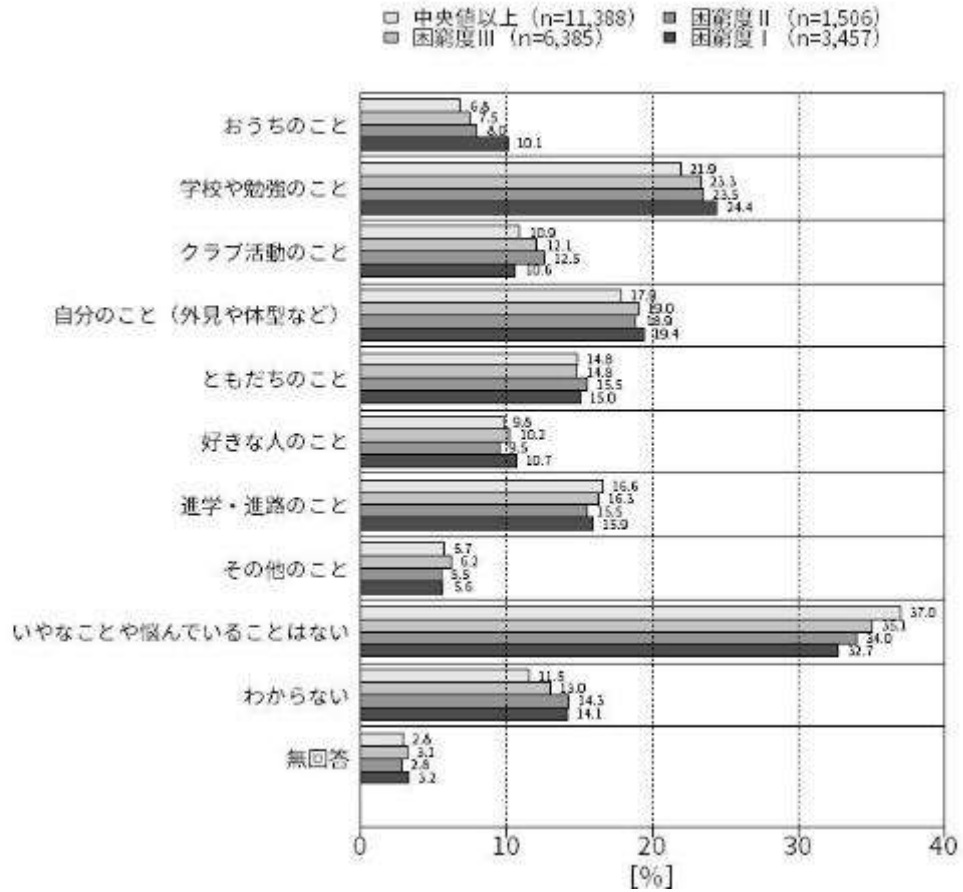
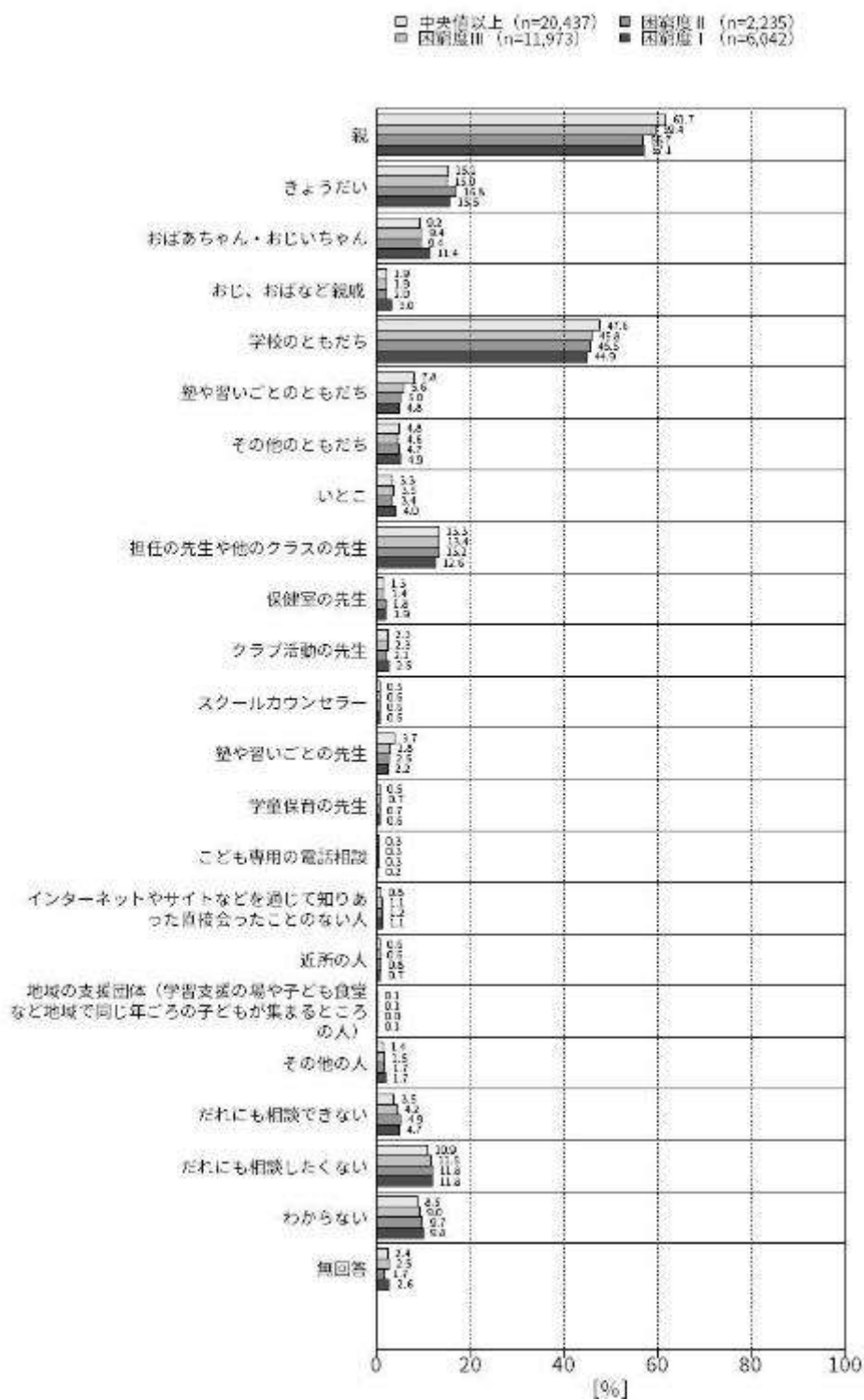


図 288. 困窮度別に見た、悩んでいること

困窮度別に子どもが悩んでいることを見ると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、困窮度Ⅰ群では、「おうちのこと」10.1%（中央値以上群に対して、1.5倍）が高かった。

困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手（子ども票 問22）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

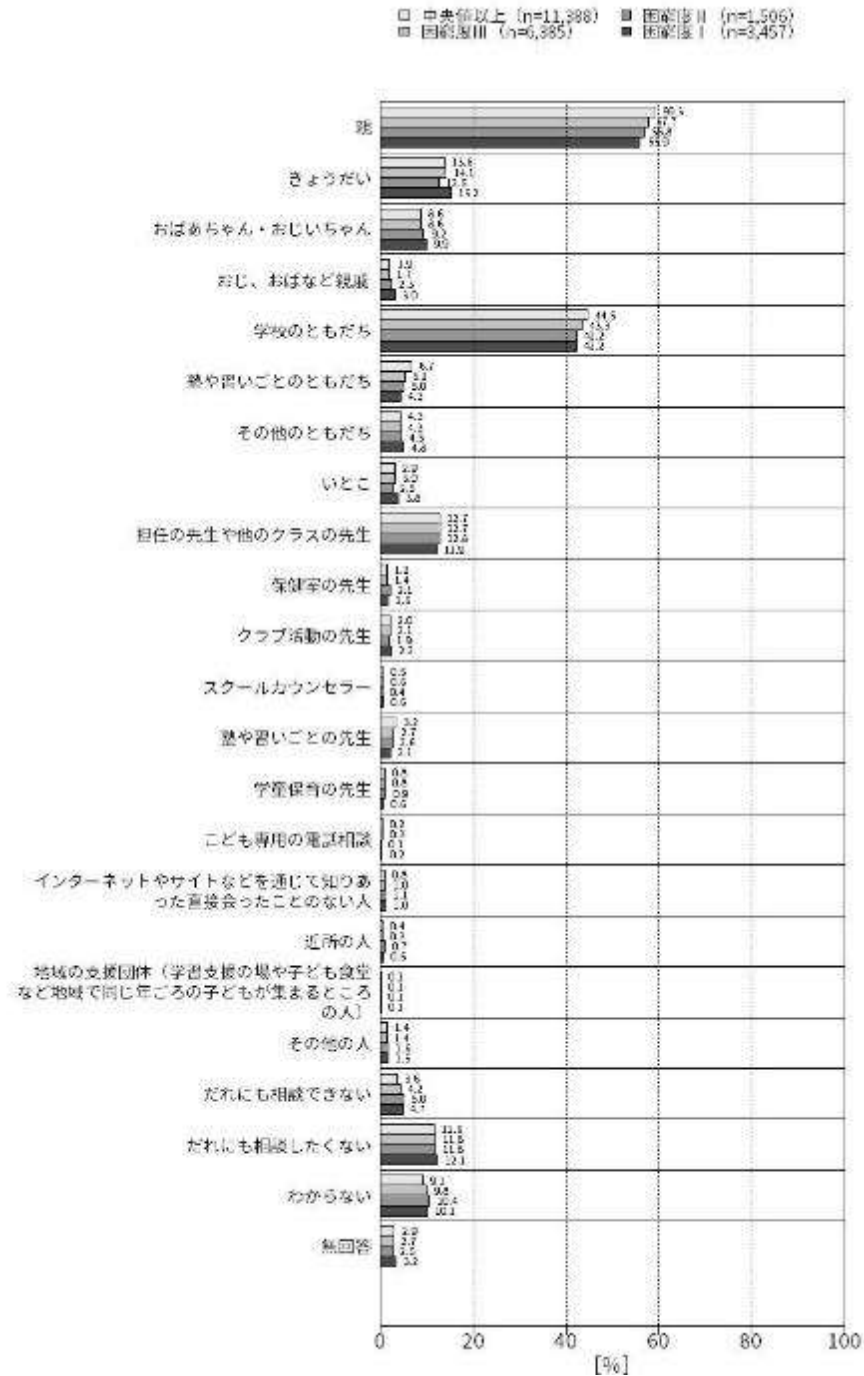
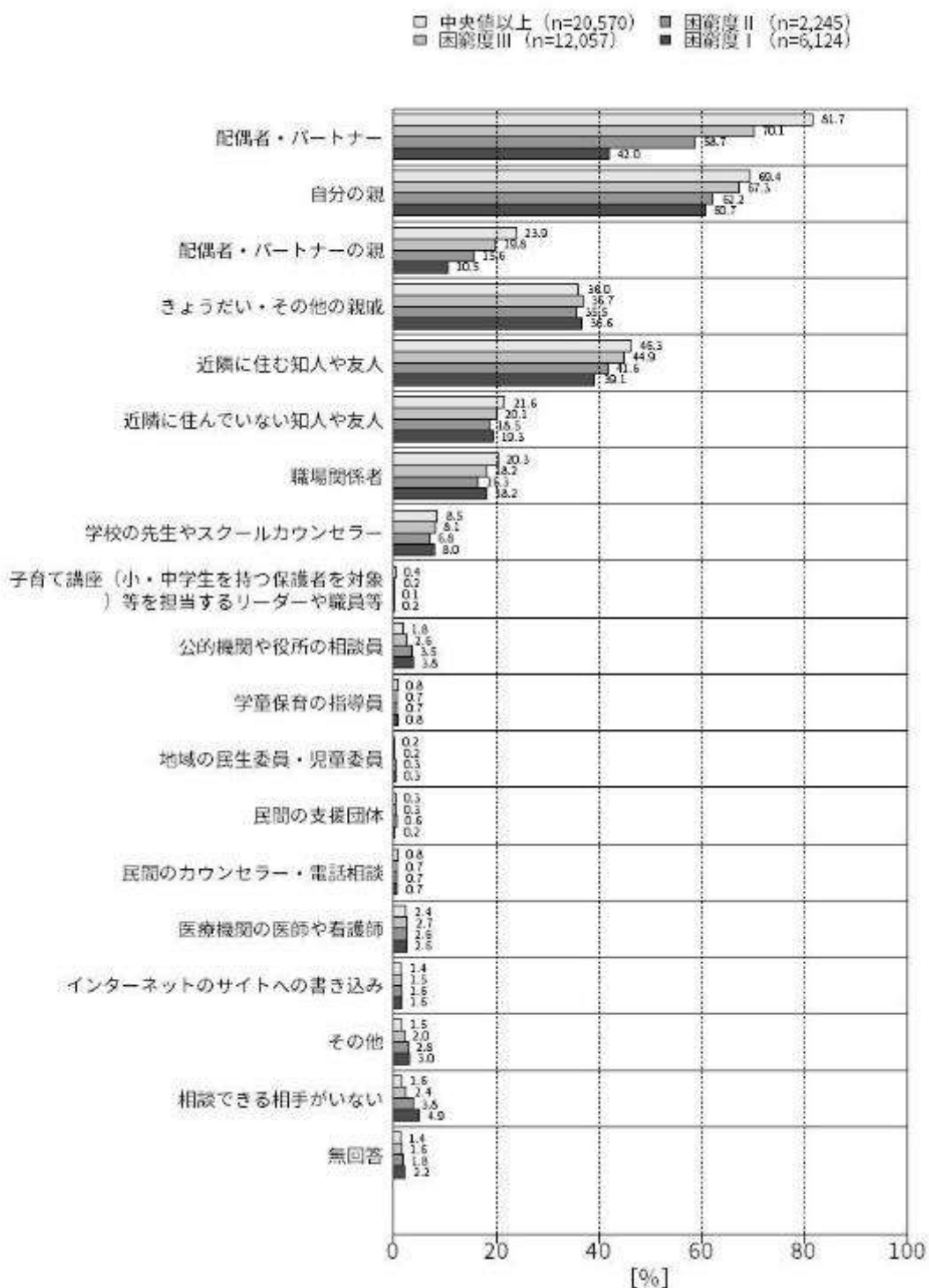


図 289. 困窮度別に見た、嫌なことや悩んでいるときの相談相手

困窮度別に子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手を見ると、中央値以上群と困窮度 I 群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度 I 群の数値を挙げると、「おじ、おばなど親戚」3.0%（中央値以上群に対して、1.6 倍）が高かった。

困窮度別に見た、困ったときの相談先（保護者票 問 24）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

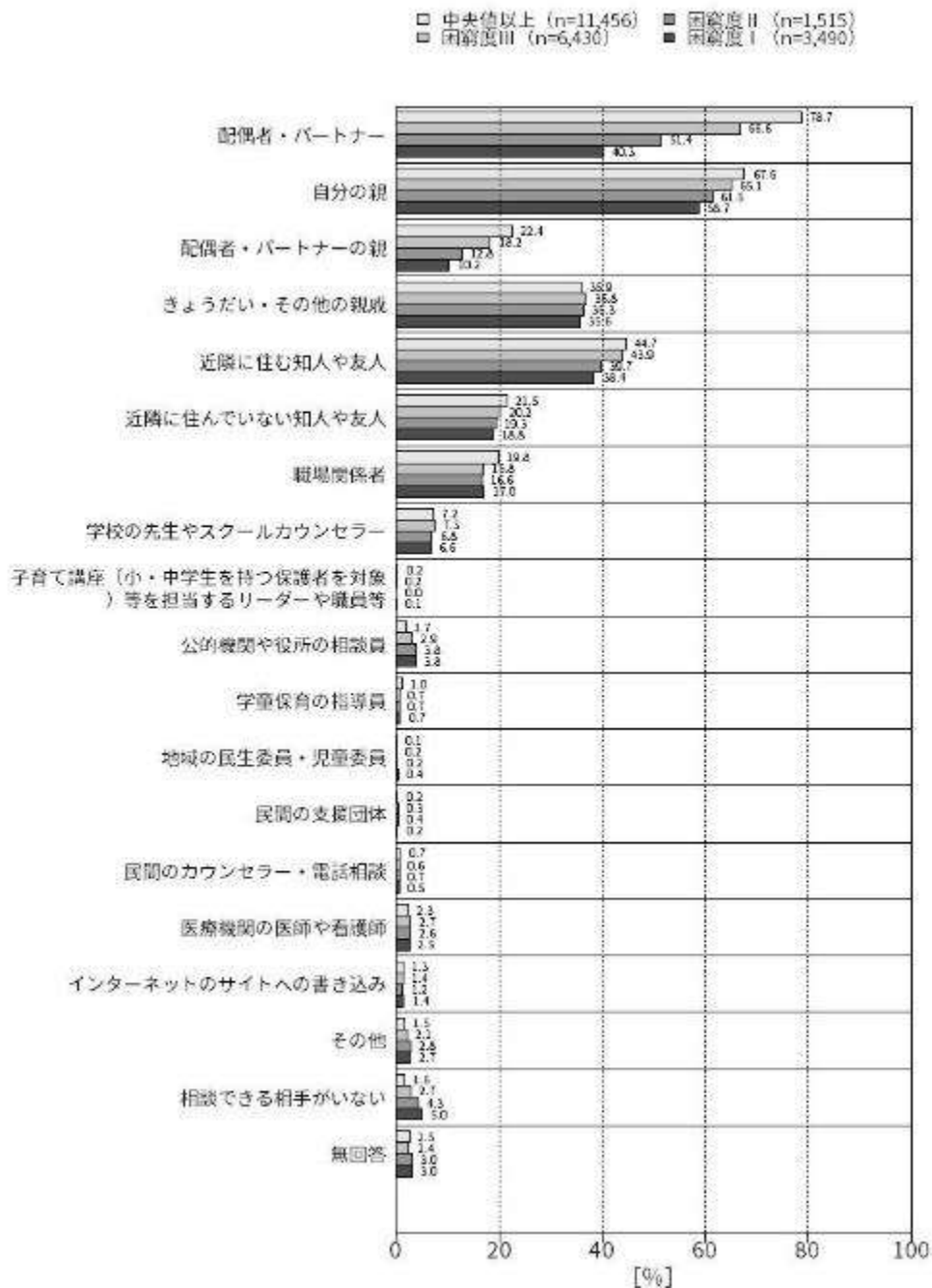
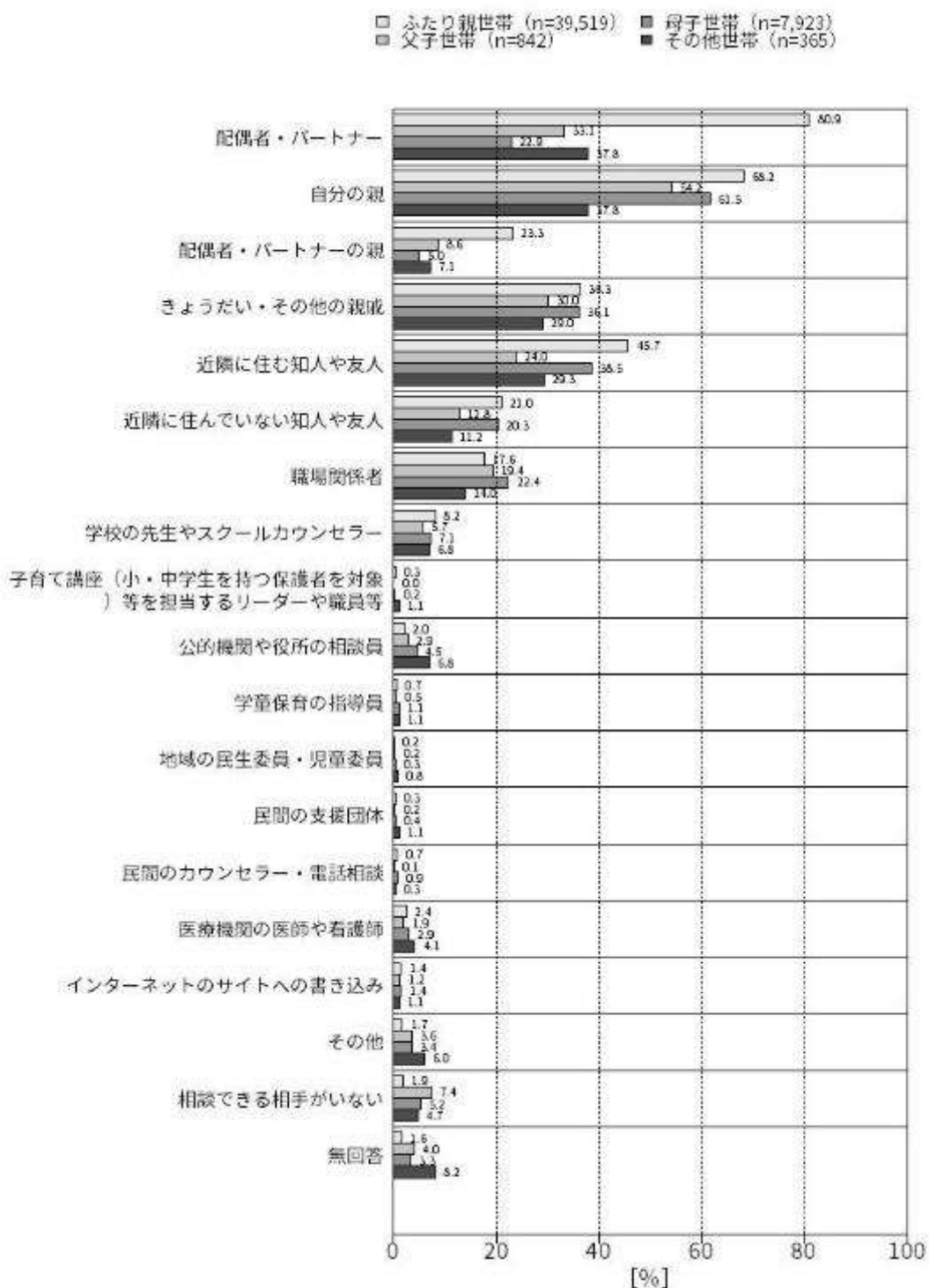


図 290. 困窮度別に見た、困ったときの相談先

困窮度別に保護者の困ったときの相談先を見ると、中央値以上群と困窮度 I 群間で差が大きい項目に着目しながら、困窮度 I 群の数値を挙げると、「地域の民生委員・児童委員」0.4%（中央値以上群に対して、4.0 倍）、「相談できる相手がいない」5%（3.1 倍）、「公的機関や役所の相談員」3.8%（2.2 倍）が高かった。さらに、中央値以上群では「配偶者・パートナー」と回答した割合が 78.7%だったのに対して、困窮度 I 群では 40.3%だった。

世帯構成別に見た、困ったときの相談先（保護者票 問 24）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

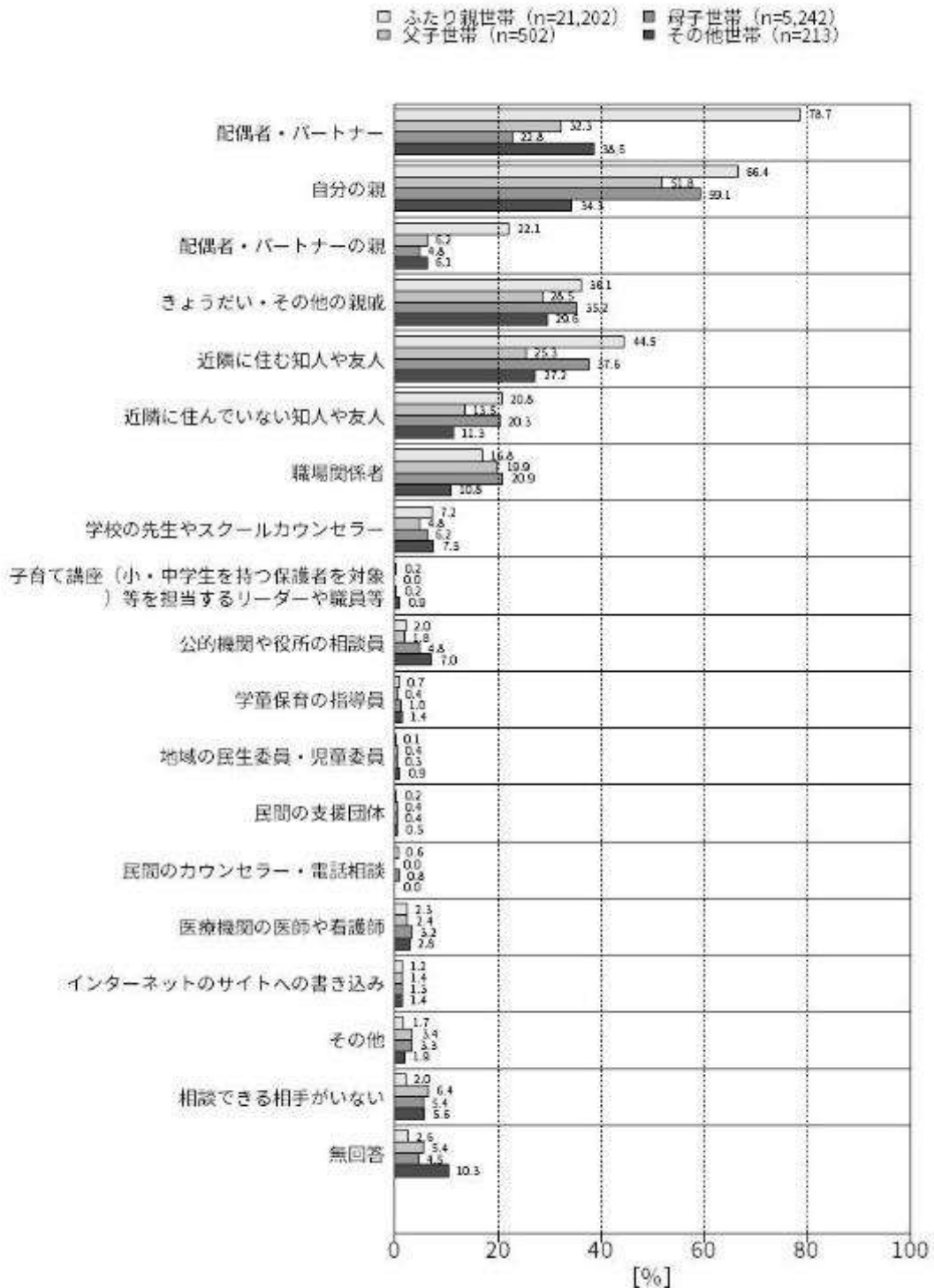


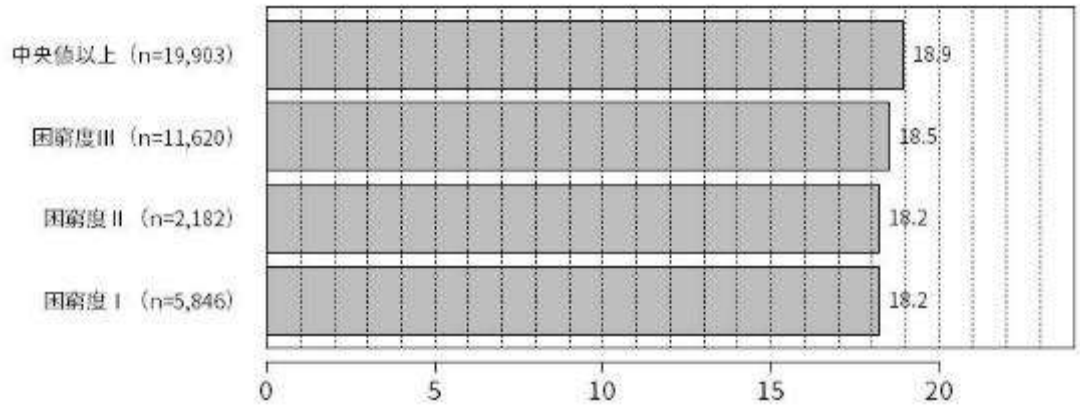
図 291. 世帯構成別に見た、困ったときの相談先

世帯構成別に保護者の困ったときの「相談相手がいない」に着目すると、ふたり親世帯で2%、父子世帯で6.4%、母子世帯で5.4%いる。

困窮度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー（子ども票 問 26 (1)～(6))

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

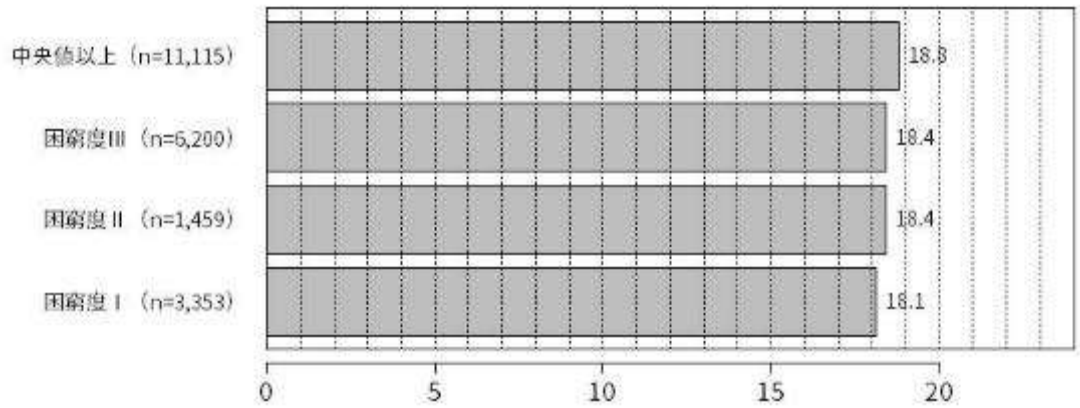


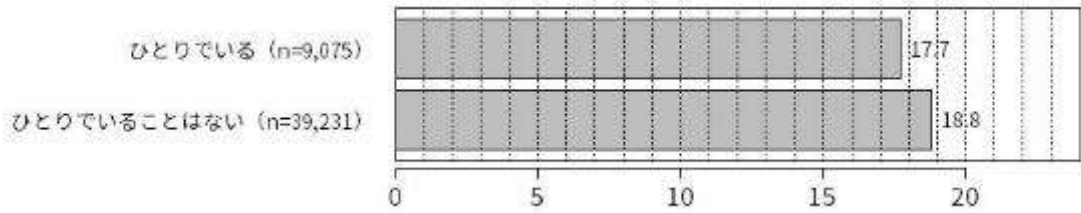
図 292. 困窮度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

困窮度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、自己効力感（セルフ・エフィカシー）の平均値は、中央値以上群で 18.8 点、困窮度Ⅲ群で 18.4 点、困窮度Ⅱ群で 18.4 点、困窮度Ⅰ群で 18.1 点である。

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どものセルフ・エフィカシー（子ども票問 12×子ども票 問 26 (1)～(6)）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

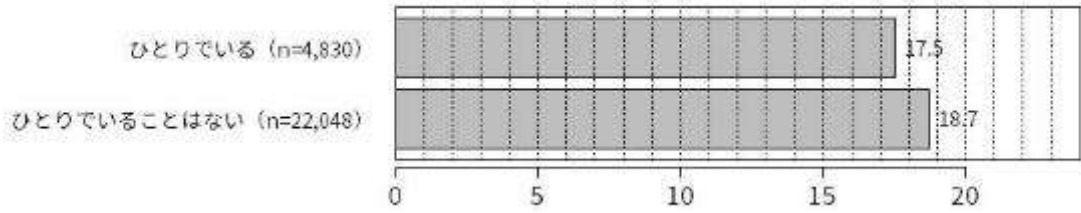


図 293. 子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかと、子どものセルフ・エフィカシー

子どもが放課後ひとりで過ごすかどうかによって子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、放課後ひとりで過ごす子どもの方が、そうでない子どもよりも自己効力感（セルフ・エフィカシー）が低かった。

困ったときの相談先別に見た、子どものセルフ・エフィカシー（子ども票 問 22×子ども票 問 26 (1)～(6)）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

※「あなたは、いやなことや悩んでいることがあるとき、だれかに相談しますか。（だれに話しますか。）」に対し、以下のようにまとめた。

家族・親戚に相談：「親」「きょうだい」「おばあちゃん・おじいちゃん」「おじ・おばなど親戚」

「いところ」のいずれか少なくとも1つを回答した人

ともだちに相談：「学校のともだち」「塾や習い事のともだち」「その他のともだち」

先生に相談する：「担任の先生や他のクラスの先生」「保健室の先生」「クラブ活動や部活の先生」

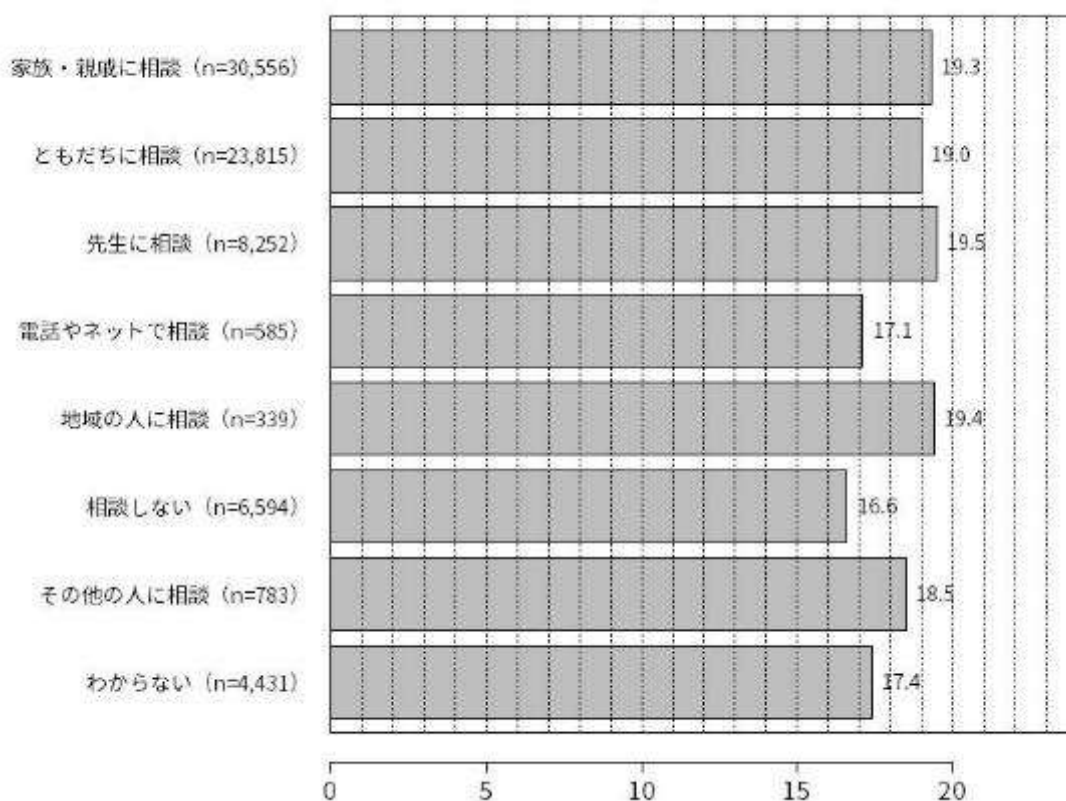
「スクールカウンセラー」「塾や習いごとの先生」「学童保育、児童いきいき放課後事業の先生」

電話やネットで相談する群：「子ども専用の電話相談」「インターネットやサイトを通じて知り合った直接会ったことのない人」

地域の人に相談する群：「近所の人」「地域の支援団体」

相談しない群：「だれにも相談できない」「だれにも相談したくない」

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

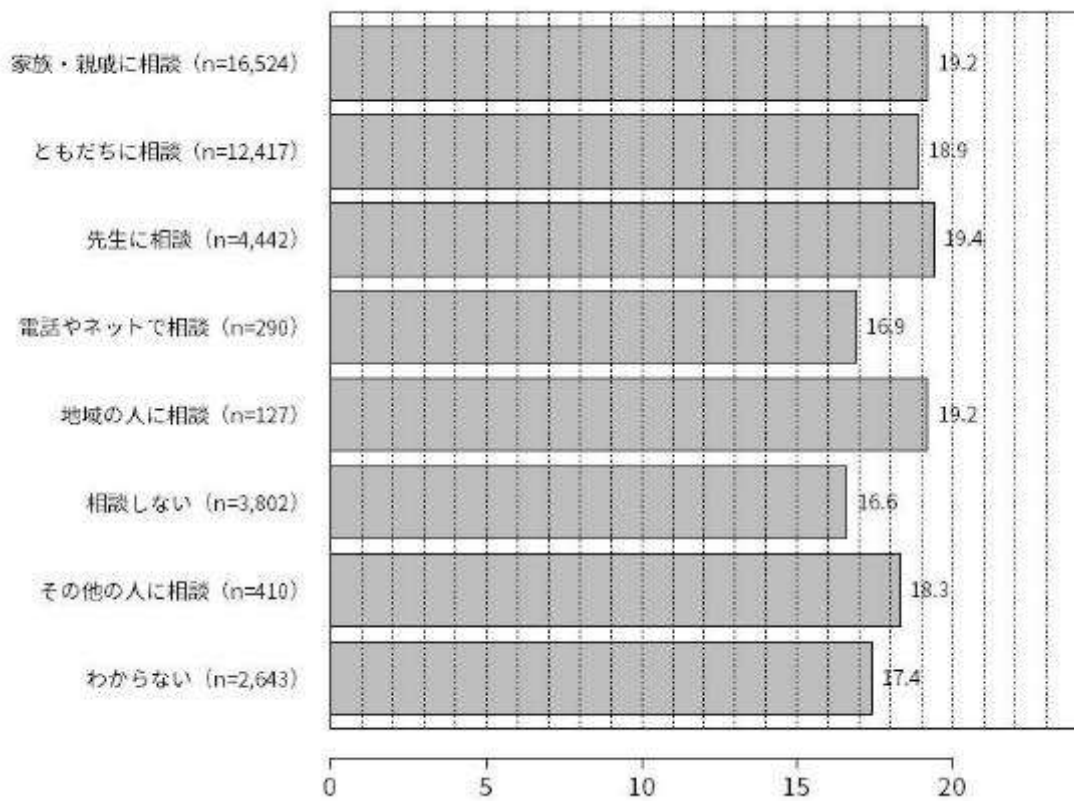


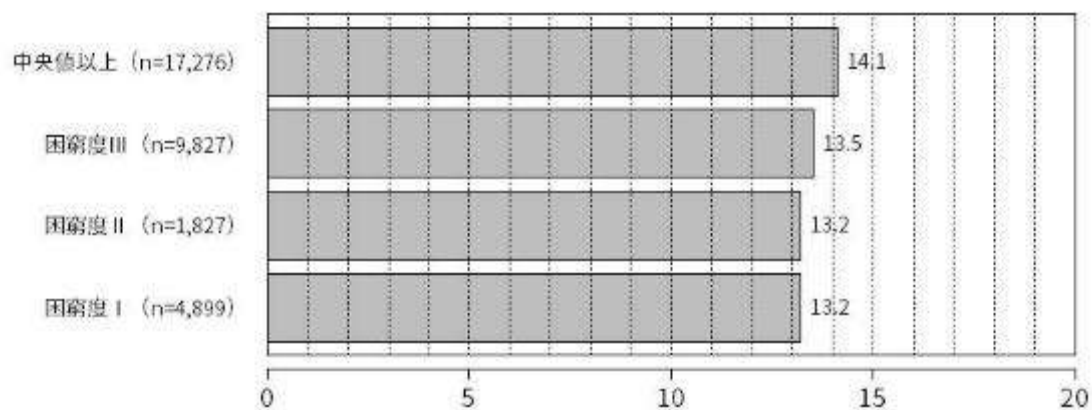
図 294. 困ったときの相談先別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）によって子どもの嫌なことや悩んでいるときの相談相手を見ると、「電話やネットで相談」「相談しない」でセルフ・エフィカシーが低かった。

困窮度別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票 問 29 ①～⑤）

※保護者のセルフ・エフィカシーについては図 197 上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

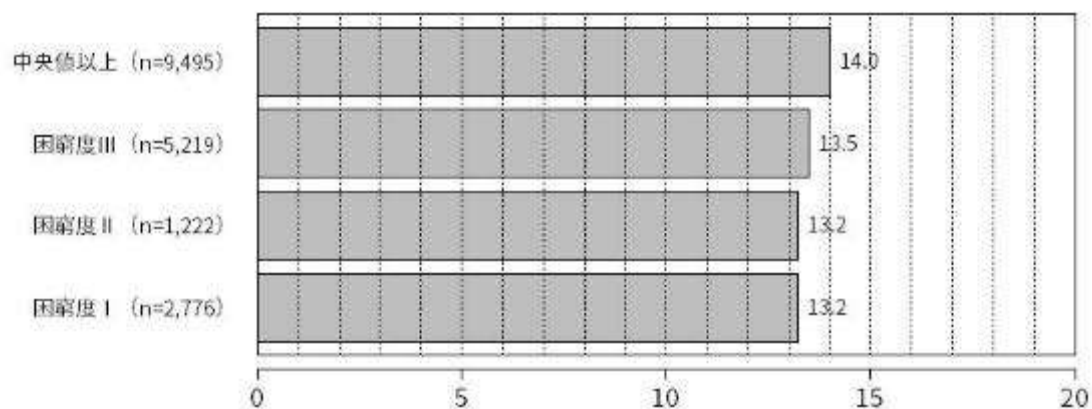


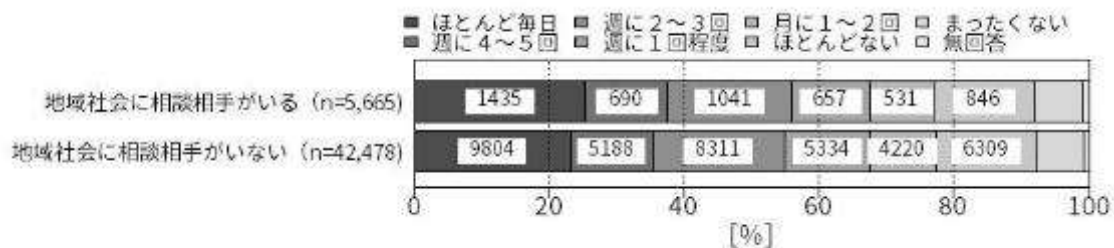
図 295. 困窮度別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

困窮度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、困窮度が高くなるにつれ、セルフ・エフィカシーが低くなっている。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）
 （保護者票 問 24×子ども票 問 10④）

※「地域社会に相談相手がいる」については図 283 上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

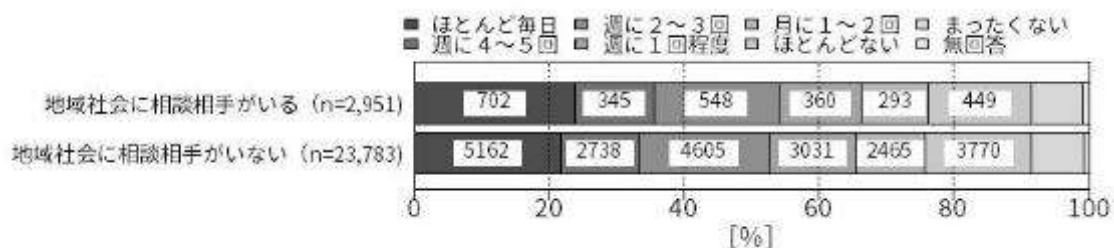
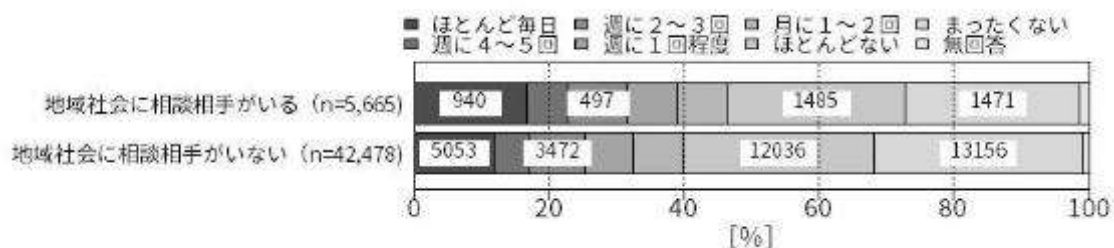


図 296. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（家の手伝いをするか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」人の方が、「地域社会に相談相手がない」人よりも、子どもが「おうちの手伝いをするか」に「ほとんど毎日」と回答する割合が高かった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）（保護者票 問 24×子ども票 問 10⑤）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

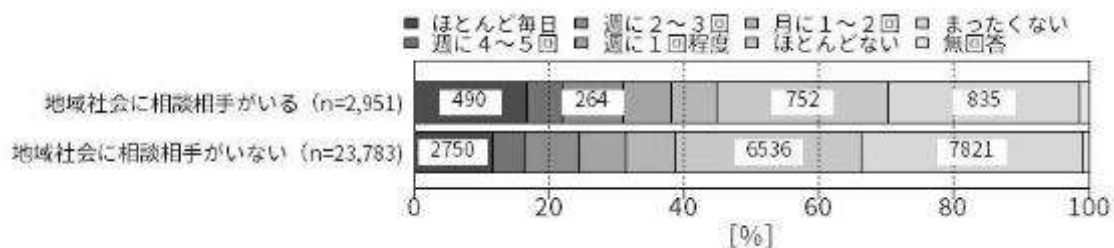
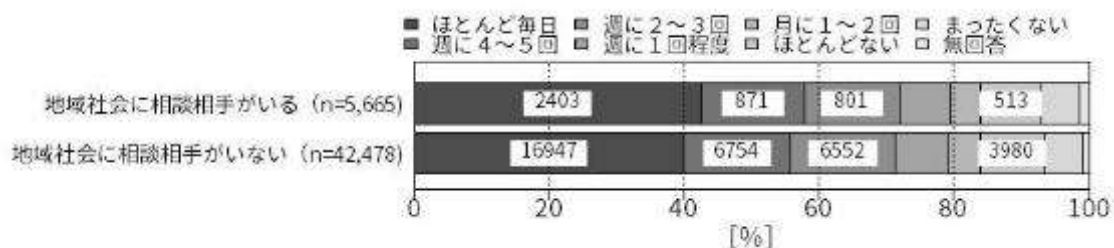


図 297. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」人の方が、「地域社会に相談相手がない」人よりも、「おうちの大人の人に宿題（勉強）を見てもらっている」に「ほとんど毎日」と回答する割合が高かった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）（保護者票 問24×子ども票 問10⑥）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>



図 298. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と学校の話をするか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」人の方が、「地域社会に相談相手がない」人よりも、「おうちの大人の人と学校のできごとについて話す」に「ほとんど毎日」と回答する割合が高かった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）（保護者票 問 24×子ども票 問 10⑦）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>



図 299. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と遊んだり、体を動かすか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」か「地域社会に相談相手がない」かによって、子どもが「おうちの大人の人と遊んだり、体を動かしたりする」に差はなかった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）（保護者票 問 24×子ども票 問 10⑧）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

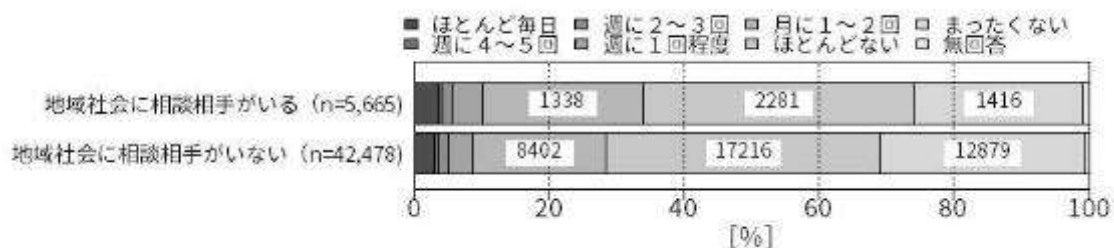


図 300. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と社会のできごとを話すか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」人の方が、「地域社会に相談相手がない」人よりも、子どもが「ニュースなど社会のできごとを話す」に「ほとんど毎日」と回答する割合が高かった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）（保護者票 問24×子ども票 問10⑨）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

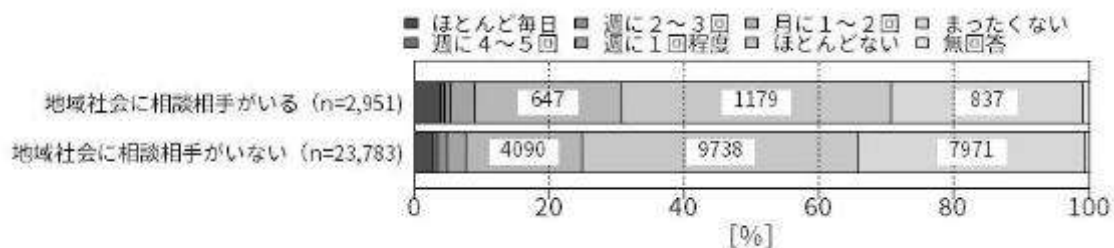


図 301. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると、「地域社会に相談相手がない」人の方が、「地域社会に相談相手がいる」人よりも、「おうちの大人と文化活動（図書館や美術館、博物館、音楽鑑賞に行くなど）をする」に「ほとんどない」「まったくない」と回答する割合が高かった。

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）（保護者票 問 24×子ども票 問 10⑩）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>



図 302. 地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）

地域社会に相談相手がいるかどうかと、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と一緒に外出するか）を見ると、「地域社会に相談相手がいる」か「地域社会に相談相手がない」かによって、子どもが地域社会に相談相手がいるかいないかによって「おうちの大人の人と一緒に外出する」に差はなかった。

<対人関係に関する考察>

本調査によると、多くの子どもは、毎日の生活の中で「おうちの人と一緒に過ごしているとき」(60.6%~62.8%)や「ともだちと一緒に過ごしているとき」(79.8%~83.0%)を楽しんでいると感じており、嫌なことや悩んでいるときには「親」(55.9%~59.3%)や「学校のともだち」(42.2%~44.5%)へ相談することが確認された。親子関係や友人関係は、子どもの日々の楽しさや、悩みの解決と関連していることが考えられる。

しかし、困窮度別に子どもが放課後一緒に過ごす相手を見ると、「おうちの大人の人」と過ごす割合は、中央値以上群で59.1%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では51.8%と、少なくなることが確認された。そのため、困窮度の高い世帯では、子どもは、保護者と過ごして楽しいと思える機会や保護者に対して悩みを相談する機会を十分に持っていない可能性が懸念される。困窮度Ⅰ群では10.2%の子どもがおうちのことで悩んでいること(中央値以上群では6.7%)も確認されており、親子間で良好な関係が築かれるような対策が必要となるだろう。たとえば、本調査では、地域社会に相談相手がいる保護者は、相談相手がない保護者よりも、子どもが家の手伝いをしやすく、宿題を見たり、一緒に文化活動をしたりする機会が多いと回答している。また、保護者に地域社会で相談相手がいる場合、43.2%の子どもが「ほとんど毎日」学校の話をしており、学校のことについて相談しやすい環境にあることも考えられる。地域社会に相談相手がいる保護者は子どもとの関係について相談できる機会を多く持つため、子どもと良好な関係を築きやすいのかもしれない。地域でのコミュニティの形成を促したり、地域の相談員などの配置を促したりといった対策をすることで、親子間での良い関係が促され、子どもの日々の楽しさや悩みの解決を促す可能性が考えられる。

また、本調査では、中央値以上群の子どもが放課後過ごす場所として「塾」30.8%、「習いごと」36.4%が挙げられるのに対して、困窮度Ⅰ群の子どもで「塾」で過ごすのは17.5%、「習いごと」で過ごすのは22.0%であった。それゆえ、困窮度の高い世帯の子どもは、おうちの人以外の大人や、学校以外のともだちと過ごす機会が少なく(図290)、毎日の生活の中で楽しいことに「塾や習い事で過ごしているとき」(22.0%)が含まれることが少ない。こうした傾向は、困窮度の高い世帯において子どもの交友関係が狭いという可能性を示唆するものと考えられる。幅広い交友関係は、コミュニケーション能力の成長を促すだけでなく、自己意識の獲得や精神的な安定を促すとされる(Markus & Kunda, 1986)。実際、本調査では、自己効力感(セルフ・エフィカシー)得点について、放課後にひとりである子どもが17.5点で、そうでない子ども(18.7点)よりも低いことが確認されている。子どもが塾や習い事に通うことを促す対策は、ただ学習理解や専門技能の獲得を促しているだけではなく、子どもの交友関係の拡大を促している可能性が考えられる。

引用文献

Markus, H., & Kunda, Z. (1986). Stability and malleability of the self-concept. *Journal of personality and social psychology*, 51, 858-866.

裏

色紙

色紙裏